

質的調査の教科書を書いてください、という依頼を受けたとき、最初に頭に浮かんだのは、マニュアルのような教科書よりも、読み物として読んで面白い本を作りたい、ということでした。質的調査に限らず、教科書というものは何でもそうですが、マニュアル化していくと、授業では使いやすいかもしれませんが、学生や院生が読んででもぜんぜん面白くありません。どうせ書くなら、授業でも使える形のままで、なるべく読んで面白い本にしようと思いました。

私は、ささやかではありますが、それなりの社会調査の経験があります。これまで、いろんな調査をして、そのつどその現場でいろいろなことを体験してきました。この歳になって、そうした体験がある程度積み重なってきました。調査の現場で、たくさんの楽しいこと、しんどいこと、辛いこと、嬉しいことに出会いました。なによりも、たくさんの人びとと出会いました。そして、現場で出会う、たくさんのしんどいことや辛いことに、自分なりに対処してきました。

気がつくと、そういう体験と、自分なりの対処法が、だんだんとひとつの「まとまり」になってきました。

私たちは、量的調査をおこなうこともありますが、仕事の中心は質的調査です。質的調査とは、簡単にいえば、「数字を使わない調査」のことです。インタビュー、聞き取り、「参与観察」、歴史的資料や新聞記事の収集など、もっぱら「質的」なデータを集めて分析することが、私たちの仕事です。こうした質的調査では、量的調査のような、すばっと切れ味のよい、クリアな知識を得ることはほとんどありません。それはひたすら地味な、地に足のついた、地を這うような、地道な調査です。したがって、そこで得られる知識も、もたもたとした、あやふやな、まとまりのないものになりがちです。

そして、質的調査で得られる知識と同じように、質的調査の「方法」に関することも、どうにも大雑把で、断片的で、いいかげんで、感覚的な知識しか得られないことがほとんどです。

しかし、ふと自分の仕事を振り返ってみると、こうした「おおまかな知識」や「なんとなく積み重なった経験」は、だんだんとそれなりにまとまってきて、

自分の「ノウハウ」のようになってきました。そして、学生や院生に伝えるときも、自分なりの伝え方ができてきました。たとえば、細かいことですが、インタビューをするときにはICレコーダの下にタオルやハンカチを敷いたほうがいいよ、というようなことです（何故なのかは本文を参照してください）。

私たちがそれなりに蓄積してきたノウハウは、それ自体が非常に「質的」なものです。それは調査の現場でとても役立つものです。

そして何より、実際の調査というものは、面白い。

このことを私は、最初の著作である『同化と他者化——戦後沖縄の本土就職者たち』のもとになった調査で学びました。この本は、復帰前の沖縄から、単身出稼ぎや集団就職などで東京や大阪に渡った若者たちの生活史を分析したものです。かれらの大半はやがて沖縄にUターンしていくのですが、このときに「沖縄アイデンティティ」がどのように構築されていくかを考えたものです。この調査で私は、さまざまな体験をしました。

私は、この私なりの経験やノウハウを、新しい教科書にそのまますべて書いてやろうと思いました。それは「読んで面白く、現場でも役に立つ」ものになるに違いありません。もちろん授業でも使いやすいものになるはずです。

この本を書くことになり、私はすぐに、二人の若手社会学者に協力してもらおうと思いました。どちらも、体を張った本格的な現場調査で高く評価されている、本物のフィールドワーカーです。

ひとりとは、丸山里美さん。私の若いときからの研究仲間で、女性ホームレスをずっと調査しています。その調査は、女性ホームレス当事者の生活に、深く入り込むものです（『女性ホームレスとして生きる——貧困と排除の社会学』）。丸山さんは、ホームレスであることに加えて、女性であることからくる彼女たちのさまざまな経験を、ほんとうにじっくりと聞き取っています。路上に出ること、路上で暮らすこと。そして路上にとどまること。丸山さんは、彼女たちの人生の、複雑な事情や、生き延びるための努力、そして積極的な選択を描いています。

もうひとりとは、石岡丈昇さん。フィリピンのマニラのスラムにあるボクシングジムに住み込んで、とても重要なエスノグラフィー（フィールドワークの記録）を書きました（『ローカルボクサーと貧困世界——マニラのボクシングジムにみる身体文化』）。一見するととても過酷な、将来の保証もないような過酷なボクシ

ングの世界に、なぜボクサーたちは入っていくのでしょうか。石岡さんは自身もジムに住み込んだ経験から、ボクシングの世界がボクサーたちによってどのように意味付けられているのかを描きました。

私はこの本に、この二人の経験と知識がどうしても必要だと思いました。そして、それぞれ「フィールドワーク」と「参与観察」の章を執筆していただくことができました。私たち3名と、担当編集者の四竈佑介さんは、東京の有斐閣の会議室に何度も集まって、何時間も熱い議論を戦わせました（そしてそのあとは冷たいビール）。そうしてできあがったのが本書です。

ここで書かれていることは、おそらく社会問題の現場の真真中で、体ごとぶつかってフィールドワークをしているものなら、誰もが経験することだと思います。そしてそのすべてを、これから現場に入っていく方たちに伝えたいと思います。

参与観察や生活史だけではなく、質的調査には、ビデオ分析や会話分析、エスノメソドロジーなどもありますが、本書ではもっとも基礎的な、「フィールドワーク」「参与観察」「生活史」の3つのタイプの調査法を取り上げました。

まず序章では、きわめて大雑把にまとめられた量的調査と比較しながら、質的調査とはそもそも何なのか議論されます。そして、第1章では、「総合的な実態調査」としてのフィールドワークの経験が語られます。第2章では、より「身体的」な「参与観察」が紹介されます。第3章では、個人の語りに基づく「生活史」調査について述べられています。

質的調査の社会学は、現場と研究室を無限に往復することでは、やっていけません。本書を読んだみなさんが、新たな現場へ入っていくときのガイド役になれば幸いです。

2016年10月

岸 政彦

岸 政彦 (きし まさひこ)

序章, 第3章

大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程単位取得退学

博士 (文学)

現在, 龍谷大学社会学部教授

主要著作

『同化と他者化——戦後沖縄の本土就職者たち』ナカニシヤ出版, 2013 年

『街の人生』勁草書房, 2014 年

『断片的なものの社会学』朝日出版社, 2015 年 (紀伊國屋じんぶん大賞 2016)

石岡 丈昇 (いしおか とものり)

第2章, ブックガイド (新しい著作, 古典)

筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科単位取得退学

博士 (学術)

現在, 北海道大学大学院教育学研究院准教授

主要著作

『ローカルボクサーと貧困世界——マニラのボクシングジムにみる身体文化』世界思想社, 2012 年 (第12回日本社会学会奨励賞著書の部)

「ブルデューの強制移住論——根こぎの形成をめぐる方法的予備考察」『理論と動態』第6号, 2013 年

『社会学ベーシックス4 都市的世界』(共著) 世界思想社, 2008 年

丸山 里美 (まるやま さとみ)

第1章, ブックガイド (教科書)

京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得認定退学

博士 (文学)

現在, 立命館大学産業社会学部准教授

主要著作

『女性ホームレスとして生きる——貧困と排除の社会学』世界思想社, 2013 年 (第33回山川菊栄賞, 第5回日本都市社会学会若手奨励賞, 第3回福祉社会学会学術賞)

「自由でもなく強制でもなく」『現代思想』第34巻第9号, 2006 年

「女性ホームレスの問題から——女性の貧困問題の構造」小杉礼子・宮本みち子編『下層化する女性たち——労働と家庭からの排除と貧困』勁草書房, 2015 年

CHAPTER 序

質的調査とは何か

1

- 1 社会学と社会調査 1
社会学って何ってよく聞かれる (1) 社会問題を研究する普通の
学問 (3) 社会問題とは (5)
- 2 社会学における「データ」とは何か 7
多様で流動的な社会学のデータ (7) 社会学における「方法」(8)
- 3 量的調査と質的調査 10
量的調査とは (10) 問題を細かく分解する (12) 量的調査の制
約 (14)
- 4 質的調査とは 15
フィールドワーク (15) 参与観察 (16) 生活史調査 (18)
- 5 「質的」とはどういうことか 20
問いの立て方の違い (20) 何を問うかによって調査法が異なる
(22) 知識とは何か (24)
- 6 「他者の合理性」の理解社会学 27
質的調査がめざすもの (27) 他者の合理性を理解する (29) 「も
うひとつのゲーム」を見つけること (31) 安易な理解は暴力であ
る。しかし…… (32)
- 7 ま と め 35

CHAPTER 1

フィールドワーク

37

- 1 フィールドワークとは 38
- 2 テーマ設定 39

2-1	問題意識を育てる	39
	はじまりは漠然とした問題意識 (39) フィールドを探す (41)	
2-2	文献リストをつくる	42
	データベースで検索する (42) 文献をリストアップする (43)	
2-3	フィールドに行こう	44
	フィールドに入る (45) 調査の依頼をする (46)	
3	フィールドワークをする	51
3-1	フィールドで何をするか	51
	「ぶらぶら」して過ごす (51) インタビューをする (52) てみやげと謝礼 (53) 記録を取る (55) 記録を取るコツ (56)	
3-2	何者としてフィールドでふるまうか	58
	施設利用者と職員としてのふるまいの違い (58) 「仲間」と支援者としてのふるまいの違い (59)	
3-3	調査者の守るべき倫理	61
	相手の都合を優先する (61) 誰の／何のための調査か (62) 調査における葛藤と覚悟 (63) ラポールの問題 (64)	
3-4	調査者の属性	65
	ハラスメントの危険性 (66) 調査者の属性は調査の個性 (67) 調査の「客観性」 (69)	
4	データ分析と論文の執筆	71
4-1	データの整理	71
	目的にあわせた文字起こし (71) データ整理から疑問が浮かびあがる (72) データの矛盾 (73)	
4-2	問いを見つける	75
	フィールドワークの焦点を絞る (75) おもしろいところはどこか (76) フィールドを離れて考える (77) 調査対象者の主観的世界 (79)	
4-3	先行研究から問いを見いだす	80
	先行研究のなかに位置づける (80) 「意志」とは何か (82) 結論にあわせて問いをつくる (83)	
4-4	論文を書く	85
	論文を書く作法 (85) 論文に書かれた順序どおりに研究が進むわけではない (88) 根拠にもとづいて書く (89) 調査の痕跡を残す (90)	
4-5	プライバシーへの配慮と成果の還元	90
	プライバシーに配慮する (90) 研究成果の還元 (92)	
5	フィールドワーク——まだ見ぬ他者と自分に出会う	92

1	「気分」からの立論	96
1-1	具体的な調査経験から	96
1-2	参与観察の核心	96
1-3	ウェーバーの「思いつき」	98
2	調査のなかから問題設定を立てる	99
2-1	わかったことを書く	99
2-2	教室での報告：知り直すこと	101
	自分にとって面白いこと／他人にとって面白いこと（101） ゴシップ的に面白いこと／社会的に面白いこと（103） 「ものの捉え方」のバージョンアップと社会的事実（105）	
2-3	対象とテーマ	106
3	フィールドへの没入	107
3-1	暗中模索の地獄	107
	「気分」から「問い」へ（107） 外してはならない事象（109）	
3-2	「待ち」の調査	110
3-3	誰として参与するのか	111
	「誰として」というカテゴリー（111） 参与観察の視点（112）	
3-4	3種の記録	114
	継続の重要性とコツ（114） フィールドの「気分」を書き残す（117）	
3-5	自分の常識から相手の常識へ	118
	フィールドの描写の例（119） 図表作成の例（123）	
3-6	「人びと」ではなく「人びとの対峙する世界」を知る	127
	「生きられた」社会問題（128） 人びとの世界の捉え方（130） 理解可能性（131）	
4	論文執筆	133
4-1	フィールドからの帰還	133
4-2	理論を使う	134
4-3	内容を一言でまとめる	137
4-4	リアルタイムと最終地点	140
4-5	「問い」をつくる	144
4-6	他者の不合理性？	146
4-7	書き控えたもの	147
5	参与観察の特徴——リアルタイムの社会認識	150

1 人生の語りを聞く 156

生活史調査という「特殊な行為」(156) 生活史調査の経験(158)
息を止めて海に潜る(160)「誰に」聞くのか(161) 当事者や関係者に聞くことの意味(162) ラポールと調査の暴力(164) 人数はどれくらいに聞けばよいか(166) 何を聞くのか①——生活の履歴としての生活史(167) 何を聞くのか②——歴史的事実についての生活史(169) 「何を語ったか」と「どう語ったか」(170) 生活史調査は科学ではない?(171)

2 生活史調査の歴史 173

2-1 生活史的センス 173

オスカー・ルイスの文体(174) スタッズ・ターケルのインタビュー(177) 民俗学の語り(178)

2-2 社会学における生活史 180

トマス・ズナニエツキ(180) 中野卓(182) 桜井厚(185)
谷富夫(189) 語りは「事実」か、それとも「物語」か(192)
そのほか、おすすめの本(195)

3 実際にやってみる 198

アポイントを取ることが最大の難関(198) アポ取りが失敗しても落ち込む必要はない(199) アポ取りの手順(201) 待ち合わせと聞き取りの場所(202) 録音機材やメモについて(203) インタビューという「異常事態」(205) 「ビントを合わせない集中」(207) どうやって質問をつなげるか(208) インタビューに正解はない(210) インタビューの終わり(214) インタビューの後で(215) テキストに書き起こす(216)

4 生活史を「研究」する 219

テキストデータの編集(219) 「歴史と構造」のなかに語りを置き直す(227) 新しい「理論」へ向けて(229) 語られる沖縄(231) 他者理解のために(234) 生活史調査の「トライアングル」(236)

5 最後に——生活史は「それ自体で面白い」 238

ブックガイド 241

あとがき 255

事項索引 257

人名索引 262

Column●コラム一覧

① 社会調査士	34
② 調査依頼書	47
③ 経 費	55
④ セクシュアル・ハラスメント	69
⑤ 外 国 語	132
⑥ 写 真	138

質的調査とは何か

1 社会学と社会調査

社会学って何ってよく聞かれる

これを読んでいるみなさんは「社会学部」あるいは「社会学科」の学生か院生でしょうか。いまは大学の学部や学科の名前も「個性的」なところが多くなっていて、社会学の頭に「総合」とか「国際」とか「情報」とかが付いているかもしれません。おおきく学部として社会学を勉強するところかもしれないし、いろんな領域が寄せ集まった学部のなかで、学科あるいは専攻コースとして社会学を勉強しているのかもしれません。あるいは、たんに「共通科目」のような授業で社会学を取って、そのレポートのためにあわててこれを読んでいるのかもしれません。

いずれにせよ、社会学という学部、学科、専攻、科目は、日本の大学のなかにたくさんあります。社会学者が書いた本もたくさん書店に並んでいて、なかにはベストセラーを連発する有名な社会学者もいます。このところずっと日本は不景気で、学生の就職もたいへんなので、「就職に有利」と言われている理系や経済学などに受験生が集まりがちですが、意外に社会学は人気があって、受験でも健闘しているところがたくさんあります。私（岸）が所属するのは、

関西ではわりと大きな私立大学で、「社会学部」という独立した学部です。福祉学科もありますが、私がいるのはそのなかでも社会学科というところで、ここでは社会学という学問を基礎から応用まで学べることになっています（ちなみに就職もわりと好調です）。

私のゼミの学生たちは、1回生（関西では大学1年生のことをこう言います）から4回生までずっと、社会学の勉強をすることになっています。1回生は、社会学の歴史や概論、社会調査の基礎を学び、徐々に専門的な授業を履修しながら、最後はゼミに所属して、社会学的な卒論を書きます。だから、私のところの学科に入学すると、社会学という学問について、かなり詳しく勉強することになります。

ところが、3回生から始まる私のゼミで、ゼミ生からたびたび質問されることがあります。いまの就活は、公式的には4回生から始まることになっているのですが、夏休みにはもうインターンシップが始まったり、就活でアピールするネタをつくるために短期留学に行ったりと、3回生の夏にはもう広い意味での就活が始まってしまいます。そのときに、よくこんなことを聞かれます。

就活の面接で、「社会学部というところは、何を勉強するところですか？」「社会学って、どういうことを勉強するのですか？」とよく聞かれるらしいのですが、そういうときは何て答えたらいいですか？

驚くことに、1回生からきっちりと社会学を勉強しているはずの学生でも、「社会学って何」って言われて答えられないのです。そして、もっと驚くことに、社会学というものを仕事にしている私でさえ、そう聞かれるたびに一瞬とまどうのです。

普通、「〇〇学入門」という教科書には、その学問の成り立ちや基礎的な概念・知識が書かれています。しかし、「社会学入門」のようなタイトルの本には、しばしば、「社会学とは何か」「社会学は何でないか」ということを、まるまる1冊費やして書かれてあったりします。素朴に読んだら、「え、そこから？」と思わずつつこんでしまうような話です。要するに、社会学という学問は、いろいろな歴史的経過があつてのことですが、さだまった定義もないし、共通の対象や枠組みや概念もなく、専門的に勉強している学生や、それで飯を

食っている研究者でさえ、「結局それは何ですか」と聞かれて答えにつまってしまうほど、あやふやで、なんでもアリで、幅広い、多様な姿をもつ、適当極まりない領域なのです。この「社会学とは何か」という問いをめぐって社会的な研究がおこなわれることさえあります。

しかし、そうはいっても、学部や学科として成り立っていて、5000人ぐらいが参加している大きな学会もあり、本屋に行けば社会学者が書いたたくさんのベストセラーが並んでいるわけですから、「だいたい社会学ってこういう感じの学問」というコンセンサスというか、慣習的な定義はあります。

社会問題を研究する普通の学問

私は、上記の就活での質問に悩む学生から質問をされたときは、こう答えるようにしています。

「いろんな社会問題について調査して研究する学問です」って言うといけ
いいよ。

この定義は、学会の規約のどこかに書いてあるわけでもないし、偉い先生が書いて定番になっている教科書にそう書かれてあるわけでもありません（そもそも社会学には定番となる教科書がありません）。しかし、たとえば、2013年10月12・13日に慶応大学で開催された、第86回日本社会学会大会の大会プログラムでは、「自由報告」のカテゴリーが以下のようになっています（わかりやすいように少しだけ編集してあります）。

学史・学説、理論、家族、都市、地域社会・地域問題、階級・階層・移動、産業・労働・組織、社会運動、災害、知識・科学、文化・社会意識、消費社会・サブカルチャー、社会病理・逸脱、福祉・保健・医療、性・ジェンダー、子ども・青年・中高年、民族・エスニシティ、国際・エリアスタディーズ、環境、宗教、教育、歴史・社会史・生活史……

学会の大会というのは、要するにその学会に所属する院生や研究者が集まって、みんなの前で自分の研究成果をまとめて報告するためのものです。「日本

社会学会」は、いろいろある社会学系の学会でもいちばん大きなメジャーなところなので、1カ所でやるわけにもいかないのです。こうやってたくさんの「部会」というものに分かれているのです。そして、その部会は、報告者のテーマに沿ったかたちでゆるやかにまとまるようになっています。要するに、このリストは、これが全部ではないですが、日本の多くの社会学者が「やっていることのリスト」になっているのです。

もう少しそれぞれの報告内容を見てみると、たとえば「反貧困運動」「寄せ場労働」「コスプレ」「依存症の自助グループ」「家族構造の変化」「雇用関係の国際比較」「児童自立支援施設」「限界集落」「少数民族の女性のライフヒストリー」「映像表現の歴史」など、そのほとんどが、かなり具体的なイシューについての報告になっています。

社会学、特に日本の社会学は、おおきくわけて2つの潮流が合体したところで成り立っています。ひとつは、ヨーロッパの社会学の古典を中心にした「社会哲学のようなもの」を学説史的に研究する社会学。そしてもうひとつが、アメリカ社会学の影響を受けた、統計やフィールドワークを用いた「特定の社会問題の研究」としての社会学です。

ざっと学会のプログラムを眺めてみればすぐわかりますが、現在の日本の社会学者が「実際にやっている仕事」は、「特定の社会問題」を対象として、さまざまな手法を用いてそのことについて調べ、調査し、分析し、そしてそうすることで、その社会問題についての知識を蓄積していく、というものになってきてます。もちろん、現在でも「理論」や「学説史」は、社会学の非常に重要な研究テーマであるわけですが、いまでは大半の社会学者が、若者問題から貧困問題まで、文化からメディアまで、教育から宗教まで、さまざまな領域における、広い意味での社会問題を調査し研究しているのです。

ずっと昔から「社会学がどういうものなのか、いまひとつはっきりわからない」と言われてきましたが、これだけ多様なテーマに取り組んでいるのですから、見た目からして何をやっているのかわからないひとたち、という感じに思われてしまったとしても不思議ではありません。しかし、たとえやっтерことが一見するとバラバラなようでも、おおまかに社会問題といわれているものを調査研究している、ということは共通しています。この世界には、社会問題といわれるさまざまな事象があって、それは経済や法律の問題には還元できない

ので、「社会問題を社会問題として考える」のは、いまのところ経済学や法学よりも、社会学が主に担っている作業なのです。繰り返しますが、この社会問題という概念は、ここでは文化やメディアやファッションなども含めた、ものすごく幅広い概念として使っています。いずれにせよ、社会学というものは、広い意味での社会問題を地道に調査・研究する学問だと思ってください。

社会問題とは

さて次に、それでは、この社会問題とはいったい何でしょう。この問題も、それはそれで本が10冊ぐらい書けるほど、大きくて重要な問題ですが、実はこの社会問題というものは、研究者が自分で構成するものでもあるのです。もちろん、ひきこもり、貧困、政治不信、環境問題といった、すでにはっきりと社会問題として認識されている問題も数多くあり、たくさんの社会学者がこれらの問題に取り組んでいます。

しかし、社会学にはもともと、「人が存在すると思っているものは、存在する」という考え方があります。逆にいえば、「存在するものは、人がそれが存在すると思っているものである」ということになります。この理論を使って社会問題を定義すると、こうなります。「社会問題とは、人びとが『社会問題だ』と思っているもののことである」。もちろん、何でもかんでも社会問題だと、自由に恣意的に定義できるわけではありません。しかし、ここで重要なことは、社会問題とは、すでにはっきりと問題として定義されているものだけではない、ということです。世界には、まだ「社会問題だ」とははっきり認識されていないけど、実は大きな問題である、ということがやまほどあります。たとえば、30年前までは、「セクハラ」という言葉すら、ほとんどの人が知りませんでした。ですから、その時代には、セクハラという社会問題は、人びとの意識には存在しなかったのです。ただ、職場や学校などで、女性たちが非常に不愉快な思いをずっとしてきていたのです。それは「名前のついていない」問題でした。人びとはそれが、自分たちの問題だけではない、大きな社会問題であるということに気が付きませんでした。まず誰かが、そのような不愉快な感覚に「セクシュアル・ハラスメント」という名前をつけ、それが「社会全体の問題である」と定義付けました。そしてそれが、それまで自分だけが感じる不愉快だと思ってきた人びとの支持を集め、非常に重要な社会全体の問題として認識されるよう

になってきたのです。

要するに、社会学という学問は、社会問題を研究対象としますが、この社会問題という対象自体を、社会学が構成していく、という側面があるのです。これまで多くの社会学者が、同業の社会学者でさえ問題だと認識していなかったような社会問題に名前をつけ、定義し、調査し、そして研究するということをしてきました。私たちは、自分の研究対象を自分で見つけ、探し出し、あるいは作り出したりすることさえあるのです。いうまでもなくこれは、「でっちあげる」ということとはまったく違います。社会学者がもたらした新たな社会問題の発見や定義は、そのあと学会や一般社会のなかで批判され、検討され、再調査され、吟味され、それがほんとうに問題なのかどうかを徹底的に問い直されるのです。そして、そうした「社会と社会学者との相互作用」のなかで、新しい社会問題へのまなざしが生み出されていくのです。

もともと社会問題といわれるものには相当な幅があります。そして、そのうえ、社会学者があらたな社会問題を発見し、再定義することもよくおこなわれます。これだけ研究対象が多様で流動的だと、しぜんと、そういう対象を調査分析する手法も、対象にあわせて多様になってきます。ですから、社会学は社会問題を調査研究する学問ですよ、と言ったとしても、よくある社会問題のリストのようなものにただ従ってテーマを選んでいるわけではないのです。むしろ、まだ名前のついていない問題を発見し、果敢に切り込んでいって、新たな社会問題の領域を開いていくというところに、社会学の価値とスリルがあるのです。

さて、社会学とはどういう学問で、社会学者たちは何をしているのかを、非常に簡単に述べました。それでは、そういう社会問題というものを、社会学者たちはいったいどのようなツールで調査分析しているのでしょうか。しかしその前に、社会問題の調査における「データ」とは何か、ということについて、最低限のことをおさえておく必要があります。

本書で書かれているのは、質的調査のほんの入り口で経験することばかりです。フィールドワークや生活史調査を継続して、自分でも論文や本を書くようになると、より難しい問題がたくさん出てきます。たとえば、参与観察やインタビューで得られた「データ」から「事実」をつくりあげていくのは、どうしたらよいのか。先行研究では質的調査のどんな側面が批判されているのか。量的調査とはどのような関係にあるのか。そして、そもそも、調査とは何か。

入門書としての本書では、こうした難しい問題を取り上げることはできませんでした。それはまたいずれ、別の機会に論ずることにしたいと思います。

ただ、これだけは言えると思います。質的な社会調査も量的な社会調査も、一見すると深く対立するようにみえながらも、それらが「社会調査」である限りは、人びとのコミュニケーションのなかで鍛えられ、試され、厳しく批判されるということは、どちらにも共通しています。社会調査は、社会を相手に、社会のなかでおこなわれる調査であり、そして調査主体である私たちもまた、社会のなかにいるのです。それは、人びとのあいだでおこなわれる調査です。数字を使っても使わなくても、このことだけは共通していると思います。

社会調査の妥当性や信頼性についての、抽象的で理論的で「哲学的」な、難しい議論はいくらでもあります。その倫理や正しさも含めて、その成否を決定するのは社会であり、そこに生きる人びとなのです。

社会調査について考えるということは、社会について考えることと同じなのです。

* * *

本書をまとめるにあたり、さまざまな方にお世話になりました。特に、東京大学の北田暁大さん、関西学院大学の金明秀さん、立命館大学の筒井淳也さん、神戸大学の朴沙羅さんからは、原稿を読んでいただいて、温かくも厳しいコメントをいただきました。北海道大学の加藤弘通さんからも、貴重な指摘をいただきました。大学院生として立命館大学の丸山ゼミに参加されていた山田大地

さん、岡部茜さん、延圭史さんにも原稿への助言をいただきました。心より感謝いたします。もちろん、筆者の能力もあり、そのご批判に十分にお応えすることはできませんでした。本書の至らない点のすべての責任は筆者にあります。

有斐閣の四竈佑介さんには、最初に本書のオファーをいただいてから、ほんとうに長い時間お待たせすることになってしまいました。お詫び申し上げます。彼の情熱と能力がなければ、本書は完成しなかったと思います。ほんとうにありがとうございました。

2016年10月

著者一同

事項索引

◆ ア 行

IC レコーダー 55, 57, 204
相手の常識 118
アイデンティティ 44, 233, 234
アイデンティティ喪失 102, 103
新しい理論 230, 236, 237
——の構築 238
アドリブのインタビュー 210
アポイントメント（アポ取り） 52, 53, 161,
198-201
アンケート調査 10, 21
逸脱集団 17
逸脱文化 181
一般化 186, 187
移動の街 228
移民社会 181
インタビュー 8, 46, 52, 53, 57, 159, 161,
177, 212
——の意図 53
——の終わり 214
——の食い違い 74
——の始まり 203
インタビューデータ 72, 74, 78, 135
インフォーマルな共同体 191
インフォーマルな組織 47
大きな物語 174
沖縄アイデンティティ 166, 170, 227, 231
沖縄の共同体 229-231, 233, 236
沖縄の戦後史 227, 228, 230
オーバー・ラポール →ラポール
思いつき 98, 99
オーラル・ヒストリー 156, 195
お礼状 55
音声データのバックアップ 215

◆ カ 行

階級文化 28

外国語 132
会話の流れ 211, 213
会話分析 218
書く／書かない 149
過剰移動 229
数の多さ 167
語り 188, 191, 192, 194, 197, 207, 237
——と事実 194
——の意味 194
——の研究 192
——の変化 79
——の矛盾 78
社会的な—— 195
語り方 171-173, 195, 239
語り手固有の語り 163
語り手のライフコース 168, 169
カテゴリー化 186
——の暴力 188, 192
感情 117
聞き取りの現場 179, 206, 208, 214
聞き取りの場所 202
擬似相関 13
記述の確かさ 109
基礎的な知識 227
気分 56, 97-99, 101, 135, 137
客観 64, 65
客観主義 69, 70
客観性 20, 68-70, 105, 112-114, 118
客観的事実 69, 70
教育制度 227
記録のものさし 118
近代化 184, 233
具体的事実を聞く生活史 170
具体的事実 169
経験則 96
経済状況 227
携帯電話 57
経費 55

- ケーススタディ 26
- ゲーム →もうひとつのゲーム
- 研究 219
 - の作法 89
 - の問い 44
- 研究者／調査者としての立ち位置 211
- 研究対象 38, 106
 - と研究テーマ 106-108
- 研究テーマ 39-42, 44, 50, 96, 101, 106, 107, 131, 162, 164
- 研究倫理 46
- 現象学的社会学 185
- 現地語 132
- 行為 30
- 行為者の選択 31
- 行為の合理性の理解 31
- 構造化インタビュー 53
- 構造的な暴力 165
- 構築主義 170
- 高度経済成長 228
- 合理性 29-31, 234
- 国勢調査 9
- ゴシップ的な面白さ 103, 104
- 個人の語り 20, 156
- ◆ サ 行
- 最終地点の記述 140
- 作業と情熱の合体 98, 99
- 差別 74, 186
- サンプリング 14, 19
- サンプル 22
- 参 与 16
- 参与観察 16-18, 27, 33, 52, 95, 102, 110, 113, 117, 142-144
 - における他者理解 131
 - の往復運動 127
 - の終わり 133
 - の核心 97
 - の成否 105
 - の第一歩 100
 - の独創性 150
 - の特徴 127, 129
- ジェンダー 66
- シカゴ学派 181, 182
- 時間的制約性 151
- 時間的予見 128, 129, 136
 - の剝奪 128
- 時間の諸効果 151
- 自己言及的な記述 113
- 自己責任論理 33
- 自己の不合理性 147
- 事実性 192
- 事実を聞く／語り方を聞く 173
- 事前の知識 227
- 実証主義生活史法 189
- 実証主義的方法 191
- 質的調査 9, 15, 19, 24-26, 38-41, 201, 227
 - と量的調査 21
 - の醍醐味 79
 - の魅力 69
 - の役割 190
- 質的データ 9
- 質問項目 14, 53, 209, 210
- 自分にとって面白いこと 101
- 自分の研究の位置づけ 84
- 社会解体の過程と要因 181
- 社会学 2, 3, 6, 192
 - の究極の目標 34
 - のデータの面白さ 8
 - の目的 30
- 社会学者 1, 4, 25
 - の課題 35
- 社会と——との相互作用 6
- 社会学的想像力 76
- 社会学的な面白さ 103, 104
- 社会学部 1, 2
- 社会環境についての知識 233
- 社会構造 189
 - と文化体系 190
 - や歴史的状況 236
- 社会調査 35, 171, 186, 187, 198, 203
- 社会調査士 34

社会問題 4-6, 161, 169, 181, 198, 199, 237

——に関わる知識 236

——の実態 173

——へのコミット 22

——へのまなざし 6

写真 57, 100, 138

謝礼 53, 54

主観 64, 69, 70, 89

取材 201

——の承諾 198

紹介者 45, 46

小集団 17, 18

焦点化 77, 81

調べたことと考えたこと 145, 146

事例の核心 108, 137

身体訓練 106

信頼関係 164, 201, 213, 227

図表作成 124, 127

スポーツと社会階層 106

住み込み調査 97, 109, 118, 127, 131, 132,
134

生活感覚 109, 128, 129

生活記録 →ライフ・ドキュメント

生活構造 189, 190

生活構造論 189

生活史 18, 19, 33, 72, 158, 163, 168, 169,
172, 174, 182, 184, 190, 193, 194, 199, 206,
207, 209, 239

——のインタビュー 160

——の語り 188, 219, 226

——の聞き取り 159, 206

生活史調査 18, 157-159, 168, 190, 204, 239

——の定義 156, 237

——のめざすもの 219

生活史的センス 174, 176-178, 180, 185,
192, 204

セクシュアル・ハラスメント 5, 65, 69

世代間生活史法 192

先行研究 42, 44, 80, 81, 83-86, 106, 107,
143

——との異同 86

戦後復興 228

専門家 162

総合的な実態調査 15

相互作用 26, 218

属性 25, 65, 67, 112, 130

卒論 8

◆ タ 行

ダイアグラム 125

体験から認識へ 137

体験した人びと 19, 113, 161, 162

対象 →研究対象

対話的構築主義 188, 189

他者 32, 118, 163

——の暴力 164

——の理解 235

——を理解する 165, 234

他者の合理性 29, 39, 65, 79, 119, 146, 147

他者の合理性の理解 32-34, 103, 146

他者の対峙する世界 131

正しい知識 162

他人にとって面白いこと 101

多様性 26

誰として参入するか 112

地域社会 103

地域調査 45

地域や時代の差 168

知識 15, 24, 62

中心的な問い 78

中範囲の社会問題 192

調査 14, 15

——における葛藤 63

——の区切り 78

——の趣旨 202, 208

——のプロセス 90

——の暴力 165, 192

——の暴力性 166

——の目的 11, 61

調査依頼 50

調査依頼書 46-48

調査者 11

—と当事者の信頼関係 163
 —の葛藤 65
 —の義務 91
 —の責任 92
 —の属性 65, 67
 調査データの整理 72
 調査テーマ 35, 198, 199
 調査票 10, 12, 14
 調査倫理 50, 61, 65
 地 理 227
 定型的な語り 196
 データ 7, 97, 98, 117, 135
 データ整理 71, 73, 75
 —と分析 78
 データの矛盾 73
 データベース 42, 43
 テーマ →研究テーマ
 てみやげ 53-55, 203
 伝統文化 227
 問 い 100, 108, 145, 146
 —の立て方 21
 動 画 57
 当事者 8, 20, 161-163, 167, 169
 —の語りを聞く 161
 ドキュメンタリー 65
 都市問題 181
 トラブル 54, 61

◆ ナ 行

ナラティブ 156
 日記（フィールド日記） 56, 116, 117
 日本の社会学 4
 年 表 72

◆ ハ 行

バイアス 14, 21, 114
 バイオグラフィー 156
 漠然とした興味関心 39
 外してはならない事象 109, 110
 ハビトゥス 136
 ハラスメント 66, 67

半構造化インタビュー 53
 比較研究 26
 非構造化インタビュー 53
 人の人生の語り 238
 人びとの対峙する世界 128-130, 140
 費 用 41
 標本スケール 167
 貧困の恐怖 128
 貧困の文化 175
 ピントを合わせない集中 207, 208, 210
 フィールド 41-44
 段階的に——に入る 46
 ——で知り合った友人 63
 ——でのあたりまえ 51
 ——でのおもしろいところ 76
 ——での関係性 60
 ——での人間関係 47, 50, 65
 ——でのホットなトピック 77
 ——での役割 52, 58
 ——の概況 101, 102
 ——の概況を知り直す 102
 ——の気分 108, 117
 ——の記録 57
 ——の現実 124
 ——の下調べ 45
 ——の特徴 77, 142
 ——の理解可能性 133
 ——への理解 51
 ——を探索 41
 フィールド体験 127
 フィールドノート 51, 56, 71, 99, 108, 114,
 115, 118, 119, 122, 134, 141, 142
 ——の過程 135
 ——の作成法 117
 フィールドワーク 15, 16, 33, 38
 ——でのおもしろいところ 84
 ——という言葉 37
 ——の最初の関門 45
 ——の焦点 75
 ——のプロセス 93
 フォーマルな組織 46, 47

フォーマルな歴史 169
不合理 28, 29, 31, 34, 103, 146, 147, 151
不合理性 147
普通の人びと 195
普遍的な方法 25
プライバシー 53, 57, 90
ぶらぶら過ごす 51, 59
文化資本 22
文化人類学 16
文化体系 190
文献リスト 43
変数 25
ボイスレコーダー 204
方法論 9
飽和 196
補足調査 80, 82

◆ マ 行

マイノリティ 19, 20, 32, 33, 186
マジョリティ 32
——とマイノリティの構造的な差別
164
マスキュリティ 106, 107
待ちの調査 110, 111
民俗学 16
矛盾する語り 194
名刺（連絡先カード） 203
メモ 56, 57, 71, 115, 116, 122, 139, 203
メンバーの流動性 124
もうひとつのゲーム 32
文字起こし 71, 72, 78, 79, 159, 161, 167,
217-219
文字起こしソフト 204, 217
文字起こしデータの編集 225
ものの捉え方 104, 105, 119, 129
——のバージョンアップ 104, 105, 119,
138, 146, 147
問題意識 41, 44, 45, 77
問題関心 101
問題設定 85-87

◆ ヤ 行

役割 60, 61
予見と予測 136

◆ ラ 行

ライフコース 168, 232
ライフ・ストーリー 156, 185
ライフ・ドキュメント（生活記録） 156,
180-182
ライフ・ヒストリー 156
ラベリング 17
ラポール（オーバー・ラポール） 64, 164
リアルタイム 140
——とオフタイム 151, 152
——と最終地点 142, 143
——の観察 18
——の記述 140, 141
——の現実 144
——の社会認識 150, 151
——の出来事 142
理解 30, 93, 165, 166, 194, 234
量的調査 11, 12, 14, 19, 22-24, 38, 40, 167
——と質的調査 9, 10, 25
——のプロセス 13
——の問題の立て方 10
量的データ 9, 15
理論 25, 219, 237
理論的思い込み（先入観） 230, 231
隣人 34, 165, 166
倫理規定委員会 61
歴史社会的な感覚 184
歴史的状況 229
歴史と構造 194, 196, 219, 227, 231, 237,
238
レコーダー 204, 205, 216
労働市場 227
録音 57, 71, 72, 203, 206
録音機材 204
論文執筆 134
論文の書き方 85

◆ ア 行

池田浩士 143, 144
 ヴィトゲンシュタイン, L. 125
 ウィリス, P. 17, 27, 31
 ウェーバー, M. 29, 30, 98, 99, 137
 上原健太郎 233
 上間陽子 233
 鵜飼正樹 99
 打越正行 233
 小川徹太郎 144

◆ カ 行

鎌田慧 133
 ゴッフマン, E. 17, 146

◆ サ 行

齋藤直子 169
 桜井厚 19, 180, 185-189, 191-193
 佐藤郁哉 55, 56, 118
 シュッツ, A. 185
 鈴木広 189, 190
 ズナニエツキ, F. W. 18, 19, 180-182

◆ タ 行

ターケル, S. 177, 180
 谷富夫 19, 180, 189-193
 デュルケム, E. 137

トマス, W. I. 18, 19, 180-182
 トンプソン, P. 195

◆ ナ 行

中野卓 19, 124, 130, 180, 182-185, 192

◆ ハ 行

パーソンズ, T. 185
 プラマー, K. 195
 ブルデュー, P. 96, 124, 127, 136, 151
 フレイレ, P. 130, 131
 ベルトー, D. 195, 196
 ポルテッリ, A. 196, 197

◆ マ 行

松田素二 131, 132
 マルクス, K. 137
 マルケス, G. 184
 宮本常一 178-180
 森達也 65

◆ ヤ 行

柳田国男 178, 180

◆ ラ 行

ラザースフェルト, P. F. 185
 ルイス, O. 174-176, 180
 レヴィ=ストロース, C. 116



質的社会調査の方法——他者の合理性の理解社会学
*Qualitative Research Methodology:
Interpretative Sociology of the Rationality of the Other*

2016年12月20日 初版第1刷発行

	きし 岸	まさ 政	ひこ 彦
著 者	いし 石	おか 岡	とも 丈
	まる 丸	やま 山	さと 里
発 行 者	江	草	貞 治
発 行 所	株式 会社	有 斐 閣	

郵便番号 101-0051
東京都千代田区神田神保町 2-17
電話 (03) 3264-1315 〔編集〕
(03) 3265-6811 〔営業〕
<http://www.yuhikaku.co.jp/>

印刷・株式会社理想社／製本・大口製本印刷株式会社

© 2016, M. Kisi, T. Ishioka and S. Maruyama.

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります。

ISBN 978-4-641-15037-9

JCOPY 本書の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、(社)出版者著作権管理機構(電話03-3513-6969, FAX03-3513-6979, e-mail:info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。